

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第46号

平成29年4月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

郷土、四條畷の誇り 楠正行

― 第5回楠正行シンポジウム (四條畷市等主催) に200人 ―



3月11日(土)、午後2時より、四條畷市・四條畷市教育委員会・なわて学実行委員会共催の「第5回楠正行シンポジウム」が、四條畷学園・

80周年記念ホールに約200名の参加者を集めて開催され、扇谷昭が講師をつとめました。

このシンポジウムは、平成25年3月、四條畷市の観光可視化戦略に基づいて、四條畷市ゆかりの人物、楠正行をしっかりと顕彰し、後世に語り継いでいこうと始まったものです。

扇谷は、「郷土・四條畷の誇り 楠正行」と題し、1部では、史実をもとにした正行の教養や生きざまと四條畷の合戦について、また2部では、正行死後、後世に与えた影響とその評価について講演しました。骨子は以下の通りです。

正成、心情の高潔さ

史料の極めて少ない楠正行ですが、如意輪寺所蔵・馬堀喜孝画の楠正行像を紹介しながら、父、正成の教えを湊川神社に残る「法華経奥書」(楠木正成真筆の楷書)に読み解きました。

当時、武士の立願文・寄進文・奉養文と云えば、ほとんどすべてが家門の隆盛と武運の長久を祈願していますが、正成の奥書には全く私的・私利的な言葉は見られず、一意国家の安泰を立願しており、正成の心情の高潔さがうかがい知れます。

正行は、父同様、観心寺の僧、龍覚坊に学びます。龍覚坊は、「父母の恩」「国王の恩」「衆生の恩」「三宝の

恩」これら四恩の教えの大切さを教え、人に仕える一本に貫く道は『誠心』にありと、また「武士はいついかなる時も困らぬ用意が必要で、針仕事も立派な武士になる学問」と、正行に全人格的な教育を施しました。

正行15歳、延元5年に建水分神社に奉納した大鳥居の扁額が残っています。木額で、表面が摩耗したため、現在、社務所に保存されています。しかし、毛筆の漆文字のため、今もかすかに読めるのです。正行直筆文字の現存史料としては最古のものですが、その文字の円熟・達筆ぶりは目を見張ります。

正行は国司として発した国宣や書状、約10通を残しています。正平2年12月15日付の国宣を紹介しました。

四條畷の合戦に向かう20日前の混乱時に書かれた国宣ですが、国司としての勤めをしっかりとしていたこと、そして国宣の文字の力強さ、筆運びを見て頂きました。

宗教、歌に通じる学識者、正行

正行は、正平2年8月の隅田城攻めを皮切りに、破竹の快進撃を続けます。父が得意とした籠城戦は一度もなく、すべて打って出ています。

11月の住吉天王寺の戦いでは、大川に溺れる敵兵を救った渡辺橋の美談は多くの人に知られています。敵味方を区別せず、深いいたわりの情、強さと優しさをもつ、我が国もののふの情、武士道の精神が生きています。

北畠親房の主戦論に抗しきれず、正行が四條畷の合戦に向かった時、九州の菊池氏や奥州の結城氏は期待できる状況にはなく、公家優越・武家蔑視の時代にあつて、南朝の命運は一人正行の肩にかかりました。

高師直との決戦を前に、正行は、吉野に詣でます。

「父の遺訓に従い、武士としての道を歩みます」との



正行の別れの言葉に、後村上天皇は「汝を股肱の臣と思う。くれぐれも命を大切に」と、応えましたが、正行の決心は変わることはありませんでした。

正行は、如意輪寺の板扉に、「かゑらじと兼ねておもへハ梓弓 なき鼓に入る名をぞとどむる」と、辞世の歌を刻み、過去帳には「各留半座乗花臺 侍我閑浮同行人 さきだたばおくるゝ人を待ちやせんひとつ蓮のうちに 残して 願以此功德平等施一切 同發菩提心往生安樂國」と、辞世の文章を書きました。

意外と知られていない辞世の文章ですが、謹行式往生楽願文の一節、法然上人の歌、観無量寿經の偈文の末尾のことばと、宗教にも、歌にも通じる学識者としての正行の像が浮かびます。

正平3年1月5日、河内往生院を發った正行千騎は、巳の刻、大東市野崎で縣下野の守3200騎と最初の衝突をします。その後、大東市北条、四條畷市南野、同中野と衝突を繰り返す、師直の首を挙げますが、それは偽首でした。そして、四條畷市雁屋に後退途中、正行・正時とも矢を射かけられ、大東市津の辺で、二人は刺し違えて亡くなりました。

戦いのあった地には、「古戦田」「ハラキリ」の小字名が残っています。

正行は、雁屋の地にある小楠公墓所に祀られています。墓所は、河内往生院、東大阪市山手町、宇治市正行寺、嵯峨野宝篋院、鹿児島甕島にもあります。特に、宝篋院には、正行首塚と足利義詮墓が並んで建っており、義詮のたつての願いで正行の横に葬ったということで、この地に行くと、敵からも畏敬を受けた正行の一面を実際に見ることができます。

高山右近、日本訣別の書状に辞世の歌引用

正行死後、南朝復権のため、北朝に降ってまで生き抜いた正儀でした。しかし、正儀の孫の代になる頃には、足利幕府の弾圧は厳しさを増し、楠氏は瀬戸内海を渡り、土佐ノ国に入り、楠瀬と名乗りました。

長宗我部元親と楠瀬氏の娘との間にできたのが、六男、文親でした。文親は、慶長3年、吉野に入り、鉄牛と名乗り、当時、衰退していた如意輪寺を再興します。そして、弁の内侍が正行の菩提を弔うために入った西蓮華台院の後に、西蓮寺を開祖しました。

因みに、扇谷の生地、津風呂は西蓮寺と目と鼻の先のところ。正行、弁の内侍との縁を感じます。

高山右近は、慶長19年、マニラ追放を前に、日本訣別の書状を残しています。そして、この中で正行辞世の歌を引用しながら、戦死して名を挙げた正行、しかし南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかりと、心情を綴っています。

この頃、名だたる大名や武士に、正行の事績が伝わっていたことを示す事績で、貴重な史料です。

また、江戸期に入り、はやった太平記読みの世界でも、

正成は理想的な指導者として輝き続けます。室鳩巢の「名君家訓」は、正成が家臣に教諭する体裁をとった武士への啓蒙的教訓書です。

しかし、この頃、正成の事績が世に出た最大の出来事は、水戸藩主徳川光圀による嗚呼忠臣楠子之墓の建立であり、碑陰に刻まれた朱舜水の正成像賛でした。

朱舜水は、清に滅ぼされた明の再興運動に尽くした儒学者で、60歳の時、長崎に亡命します。安東省庵と師弟関係を結び、安東省庵の記した三忠傳を百読して、正成像賛を、実に10年の歳月をかけて書き上げます。

この正成墓は、御影石・白川石・和泉石が使われ、正成の生地・活躍した地、最期の地と、その人生が織り込まれていて、正成に寄せる思いの深さが分かります。

元禄15年に起きた赤穂事件は、当時、「楠の、いま大石となりけり」と、足利將軍の由緒ある家筋吉良家を断絶に追い込んだ大石内蔵助は、正成の生まれ変わりを容易に連想させたのでしょう。

江戸末期、森田節齋は、藤原鎌足を祀る談山神社は立派なのに、正行の髻塚はなぜこんなにも荒廃しているのか、二人は同じ忠臣ではないか…と、如意輪寺の小楠公髻塚の碑に刻しています。

吉田松陰は、生涯に4たび正成墓に詣で、会ったことのない正成、まして海外の人朱舜水なのに、自然と涙する自分に気づき、楠公精神が朱舜水、そして自らに伝わり、生きていることを実感しています。

朱舜水作、正行像賛で事挙げを

戦前、尋常小学修身教科書の全学年に登場した正行。明治33年の皇居前の正成像を皮切りに、大阪府内各地に建てられた正成・正行像。大阪府内小学校には76校で77体の楠像が建てられました。

しかし、昭和20年の敗戦とともに、楠一族の事が声高かに語られることはなくなり、教科書からも姿を消します。歴史に翻弄された楠一族の悲哀を思わざるを得ません。

平成18年、田辺聖子は、正行の事を「誇るべきロマンチックな人」と賞して、『もうそろそろ事挙げしてあげてもよいのでは』と、訴えました。

扇谷は、楠公父子別れの図の賛文であれば、父子ともにあるはずと探し続け、平成27年3月、国立国会図書館関西館で、朱舜水の正行像賛をついに発見しました。

郷土、四條畷の誇り 楠正行。正行ゆかりの四條畷から、正行事挙げとして、正行像賛148文字を、一人でも多くの人に伝えたい、と願っています。

正行の生きざまに武士道の精神を見えています。この正行シンボが今後も引き続き開催され、また春には楠公父子物語の日本遺産が認められ、自ら立てた志に潔く生きるという、今の時代にも通じる正行の生きざまが、今の日本に蘇ることを願っています。(写真：四條畷市提供)

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)